

なす からすやま

No.131

Public Relations Magazine of Nasukarasuyama City

烏山の山あげ行事がユネスコ無形文化遺産へ…	2
山あげ祭……………	6
参議院選の本市の投票率は55.50%…	12
防災サミットin那須烏山……………	14
まちのわだい……………	18
インフォメーション……………	20
シリーズ 烏山高校ってこんなところ！…	22

2016

8
August

かがやくえがお(7月24日、山あげ祭ブンヌキ)

ユネスコ無形文化遺産とは

国際連合教育科学文化機関（以下「ユネスコ」という。）による人類の無形文化遺産の代表的な一覧表（以下「ユネスコ無形文化遺産の代表一覧表」という。）への記載の取り組みは、平成15年3月に開催されたユネスコの総会において採択され、後に発効された無形文化遺産の保護に関する条約に基づき、平成18年4月よりスタートしました。

この条約の締約国数は168ヶ国（平成28年6月現在）に及んでいます。この国際的な取り組みは、世界にある伝統的舞踊、音楽、演劇、工芸技術、祭礼等の無形文化遺産を消滅の危機から保護し、次世代へ伝えていくための国際的な協力や援助の体制を確立する目的があります。これらがいわゆる「ユネスコ無形文化遺産」の取り組みになります。

我が国においては、昭和25年に文化財保護法が施行され、現在までに無形の文化財を含めた文化財保護の枠組みが確立されており、他国に先駆けた無形文化遺産の保護に関する取り組みといえます。

ユネスコ無形文化遺産の代表一覧表の総登録数は世界で336件（平成28年6月現在）になります。そのうち、我が国の無形文化遺産は22



件となっています。

烏山の山あげ行事（以下「山あげ行事」という）は、日本政府の決定により、平成27年3月に全国33の国指定重要無形民俗文化財である祭礼行事と一括されて「山・鉾・屋台行事（やま・ぼこ・やたいぎょうじ）」という名称で、ユネスコ無形文化遺産の代表一覧表への登録を目指し、フランスのパリにあるユネスコ事務局に提案されました。

本年11月28日（月）～12月2日（金）の日程で、エチオピアの首都アディスアベバにおいて、「山・鉾・屋台行事」のユネスコ無形文化遺産の代表一覧表への登録を審議するユネスコ政府間委員会（無形文化遺産保護条約政府間委員会）が開催されます。各国から提案のあった無形文化遺産について、ユネスコ無形文化遺産の代表リストに記載するか否か、24カ国のユネスコ政府間委員会（任期4年、2年毎に半数改選）において、事前に行われた評価機関の審査を踏まえつつ、最終決定されます。

ユネスコ政府間委員会における順調な審査を見守りながら、山あげ行事が全国33の仲間とともにユネスコ無形文化遺産の代表一覧表に登録されることを、皆さんとともに祈りたいと思います。

烏山の山あげ行事

全国33の団体とともに 今秋ユネスコ無形文化遺産へ

～世界の宝になることを願って～



上:山をあげる若衆。
下:迫真の演技を見せる踊り子。

我が国の無形文化遺産登録(代表リスト記載)現在22件

2008	能楽 人形浄瑠璃文楽 歌舞伎
2009	雅楽 小千谷縮・越後上布【新潟】 日立風流物【茨城】 京都祇園祭の山鉾行事【京都】 飫島のトシドン【鹿児島】 奥能登のあえのこと【石川】 早池峰神楽【岩手】 秋保の田植踊【宮城】 チャッキラコ【神奈川】 大日堂舞楽【秋田】 題目立【奈良】 アイヌ古式舞踊【北海道】
2010	組踊 結城紬【茨城・栃木】
2011	壬生の花田植【広島】 佐陀神能【島根】
2012	那智の田楽【和歌山】
2013	和食：日本人の伝統的な食文化
2014	和紙：日本の手漉和紙技術【石州半紙、本美濃紙、細川紙】
提案中	山・鉾・屋台行事
提案中	来訪神：仮面・仮装の神々

山あげ行事Q&A

「歴史と伝統を誇る自慢の祭「山あげ行事」」

Q1 山あげ祭と山あげ行事の違いは。

A1 山あげ祭は、奉納余興である山あげ行事、ブンヌキや屋台の曳行の屋台行事、八雲神社のみこしなどを含めた総称と言えます。山あげ行事は、奉納余興の部分に該当し、竹や烏山和紙などの特産材料、屋台などを巧みに用いて、山をはじめ道具類を舞台背景として多彩な所作狂言を上演する当地独自の行事であり、それらが国指定重要無形民俗文化財になっています。

Q2 山あげ行事の起源はいつか。

A2 1560年(室町時代)の烏山城下では疫病が流行し、時の城主の那須資胤という殿様がこの災厄を避けるため、牛頭天王を城下に勧請し、その社の祭礼で奉納余興が行われたのが祭の起源といわれています。

祭りは当初、相撲や神楽獅子舞等が行われていましたが、江戸後期になると歌舞伎が隆盛になり、常磐津や歌舞伎舞踊を取り入れ、舞台装置や背景も今日のような大規模なものに変化したといわれています。

山あげ行事は、昭和34年11月27日に県指定民俗資料、昭和38年3月29日に国選択無形民俗資料、昭和54年2月3日に国重要無形民俗文化財に指定されました。

Q3 各地の地歌舞伎や野外舞台と比べ、山あげ行事の「ここがすごい」という点は何か。

A3 山あげ行事で使用する屋台は、曳行という機能のほかに、極彩色の彫刻を施した御拝部分が、お囃子をしながら、横に移動し、その台車がメーン舞台に早変わりします。また、道路上、100mの奥行きに高さ10mを優に超える大山など大掛かりな舞台装置を遠近よく配置し、移動式の野外劇場の準備が整います。それらを背景に歌舞伎舞踊が行われます。絢爛豪華で独自の進化を遂げた屋台、芸題の進行に合わせて千変万化する仕掛けの数々、スケールの大きさが自慢です。

Q4 山あげ観覧の際、特に「ここに注目」という鑑賞のポイントは何か。

A4 ①開演の約30分前に、若衆の糸乱れぬ団体行動による屋台の早変わりから始まり、道路上奥行き100mに、全て手作業で組立てて据えられる舞台装置、10mを優に超える大山を人力であげる作業などの準備風景は必見です。山をあげる作業は、山あげ行事の名前の由来にもなっています。また、時間がありましたら終演後の撤収作業もご覧ください。

②歌舞伎舞踊の進行に合わせて繰り広



そるばんを使って屋台をスライドさせる若衆。

げられる、踊り手の衣裳、舞台背景、舞台装置など千変万化する仕掛けの数々、山も舞台の一つとなり、季節が変われば山の景色も変わります。山より滝が流れ落ちます。現在は花火による演出が行われていますが、昔は米を流したといわれています。

③全て地元の人々が1年掛けて練習した常磐津の三味線に合わせて舞うプロも絶賛する本格的な歌舞伎舞踊、名取りの踊り子もいます。また、将来の山あげを担う子どもたちも大人顔負けの歌舞伎舞踊を行い演じます。

Q5 若衆たちが、山あげ行事で一番大切にしていることは何か。(若衆より聞き取り)

A5 若衆の一致団結が祭りの出来を左右するといわれています。司令塔である木頭、各部署、舞台、御拜、松浪、館、前山、中山、大山の主任、そして100人を超える若衆の信頼関係のもとに一致団結して機敏な動きが機能しなければなりません。

先輩から受け継いだ伝統、しきたり、礼節を重んじることが若衆相互の信頼関係をより深くするといわれています。笠揃から笠抜まで奉納余興は長丁場になります。若衆さんたちはどのような点に苦労しているか。(若衆より聞き取り)

A6 山あげ行事は移動式の歌舞伎舞踊であるため、気象条件等により上演時間が遅れるケースがありますが、観客のために、決められた上演時間を守ることが求められます。また、千変万化する仕掛けの数々が歌舞伎舞踊の見せ場になりますので、常磐津、踊り子、そして若衆の息の合った連携が重要になります。

登録に向けて観光客の受け入れ体制を構築 英語の文化財説明看板・多言語化した映像制作も

市では、烏山山あげ保存会（以下「保存会」という。）が保存及び継承する山あげ行事のユネスコ無形文化遺産の代表一覧表への登録を控え、全庁的な取り組みに向けた対応方針を策定し、国内外から多くの人々が本市を訪れることを想定した受入れ体制の構築を計画的に推進してきました。

統一した色、デザイン等を規定したサイン計画を策定し、外国人観光客等にも対応した英語表記による文化財の説明看板等を随時設置しています。

また、世界的な視野で旅行者、観光客等に訴求する施策の1つとして、市公式ホームページの多言語化、山あげ祭を多言語で視聴できる映像制作等にも取り組みました。山あげ祭の動画は、市ホームページやYouTube等で視聴

することができます。

今年度は、鹿沼市と那須烏山市の関係者で構成する地域文化活用促進協議会を組織し、国の地方創生加速化交付金を活用した「下野の国二大祭り×2」まちの賑わい∞プロジェクトを実施しています。計画事業としては、出前まつりプロモーション、都内バスラッピング等の広報活動、共通ガイドブックの作成、トラベルサイトへの情報掲載、観光体験メニューの開発、コラボレーションによる商品の開発、基調講演等が予定されています。

先人から受け継いだ無形の文化遺産が、地域の元気と活力を取り戻し、地方を創生する資源として注目を集めています。



上：英語表記の文化財の説明看板。

下：今年4月からYouTubeで公開されている山あげ祭PR動画。

山あげ行事を次の世代に…

今日の山あげ行事は、祭礼行事にとどまらず、八雲神社の宮座組織をはじめ関係者の日々の生活に密接に関わり、地域コミュニティの形成や世代間交流の場としての役割を担うとともに、市民全体が誇りに思える貴重な財産となっています。

保存会では、国、県及び市との連携を図りながら、先人から受け継いだ貴重な財産である山あげ行事の保存や継承を図るため、補助金を活用した計画的な道具類等の修理を行うとともに、当番町への人的・財政的な支援、出演する子どもたちなどへの常磐津や舞踊の指導、お囃子団体への助成を行いながら、山あげ行事の安定した開催や後継者の育成に努めています。

しかしながら、社会経済情勢の変化、少子高齢化の進展、生活様式の多様化、人口減少問題等々により、若衆組織の維持や人材の確保など安定した山あげ行事の開催が困難になりつつあります。

今回の山あげ行事のユネスコ無形文化遺産への登録申請というタイミングを捉えて、私たちは、山あげに関係された先人の方々への敬意と感謝、そして歴史と伝統を誇る市民自慢のお祭りを次の世代にしっかりとつないでいく責務などについて、真剣に考えなければならない時期にきています。

市民の皆さんとユネスコ無形文化遺産への登録を祈りながら、先人の功績や安定した山あげ行事の開催を考える機会にしたいと思います。



山あげ祭



国指定重要無形民俗文化財「烏山の山あげ行事」と八雲神社のみこしなどで構成される本市最大の祭り「山あげ祭」が、今年の当番町「金井町」によって7月22日(金)から24日(日)にかけて烏山地区の市街地で開かれました。期間中には、昨年より1万8千人多い10万人が来場。大勢の観光客が歴史と伝統を誇る日本一の移動式野外劇を楽しみました。

今月号では、今年の山あげ祭の様子を紹介します。

10万人が絢爛豪華な移動式野外劇を堪能
 450余年の伝統受け継がれる

祭前夜の「笠揃」
三番叟と将門を披露

祭前夜の21日(木)には、金井町で宵祭といわれる「笠揃」の行事が行われました。まず、会所開きを前に、金棒曳きと呼ばれる5人の子どもたちを先頭に、屋台が保管されている山あげ会館から世話人や若衆たちが屋台を引いて金井町内を練り歩きました。

午後5時30分に金井町会所で会所開きが行われ、金井町連合自治会長の國井昌美さん、菊地義之筆頭世話人、関係者などがあいさつした後、木頭や副木頭、大山主任など各担当の若衆が紹介されました。その後、木頭の指揮で若衆たちは素早い動きで山を次々とあげ、

午後7時の公演には、ライトアップされた山の前で山あげ保存会芸能部会により「三番叟」と今年の主芸題「将門」が演じられました。

待ちに待った祭初日
出御のみこし担ぎ出す

本番初日となった22日(金)、午前6時から、八雲神社からみこしを担ぎ出し、当番町である金井町を一周し、仲町十文字の御仮殿にみこしを奉還する「出御」が行われ、金井町若衆によって威勢よくみこしが担がれました。

その後、祭の中でも最も重要な儀式でもある御仮殿前で山を奉納する「天王建」が行われ、大勢の人でにぎわいました。そして、それが終わると、他町で余興を奉納する



①笠揃で披露された「三番叟」②18の公演すべて日本語、英語、中国語で山あげ祭の紹介がされました③当番町「金井町」若衆による出御。

④開演の太鼓を鳴らす⑤急な雨に屋台にビニールをかける
若衆⑥5町によるブンヌキ⑦舞台裏では衣装チェック⑧⑨
再来年の当番町「泉町」による渡御⑩5年ぶりに仲町に訪問
⑪真剣な眼差しで⑫迫力満点な鬼女が現れる「戻橋」⑬山
あげ会館前の特別公演では大勢の見物人⑭役に入り込む踊
り子⑮ちよっと一休み⑯若い若い若衆もお手伝い。

大勢の観光客で にぎわった2日目

「訪問」が各町会所前などで行われます。他町を訪問する際には、金棒曳きを露払いに世話人衆が先導し、町境にさしかかると、訪問先の町の世話人衆と若衆が整列してお出迎え。訪問する側は、相手の町内を借りる旨を口上し、受ける側は案内する旨を口上し、訪問先町内での移動は、その町の世話人衆が案内します。この訪問は、2日間にわけて行われました。また、今年は昨年活動を再開した仲町へ5年ぶりに訪問が行われました。

2日目となる23日(土)には、午前6時から泉町若衆による「渡御」が行われました。この渡御とは、再来年の当番町が御飯殿からみこしを担ぎ出し、6町に屋敷町を含めた7町を巡回するものです。先頭は触れ太鼓、続いて赤面の天狗と青面のからす天狗、みこしと続いて町を練り歩き、正午までに再びみこしが御飯殿に納められました。

奉納余興は、前日に引き続き他町への訪問が行われたほか、特別公演、金井町での公演が行われました。祭期間である3日間のうち、披露される「将門」「蛇姫様」といった演目のほか、この日のみ「戻橋」が組み込まれ、迫力満点の鬼女

が登場し、大勢の観光客を楽しませました。

盛大に開かれた3日間 祭に幕を下ろす

祭最終日の24日(日)、この日の公演は5つ。全ての公演で、棧敷席の販売に長い行列ができるほどの盛況振りでした。特に、山あげ会館前で行われた特別公演は、見渡す限り人・人・人。常磐津に合わせた踊り子の素晴らしい演技、舞台裏で若衆によって操作される山の切り替えや舞台装置の見事な仕組みに観客からは歓声が上がりました。

午後5時からは、御飯殿のみこしを八雲神社に戻す「還御」の始まりです。みこしは、来年の当番町「仲町」の若衆に担がれ、夜中まで町を練り歩きます。同時に、旧烏山町内の子どもみこしが一斉に練り出し、沿道からの声援に笑顔を見せながら元気良くみこしを担ぎました。

八雲神社前では、時を同じくして各町のお囃子が競い合う「ブンヌキ」が行われました。ブンヌキには、還御を行う仲町以外の5町が参加。鳴り響くお囃子の音と若衆の歓声に大勢の人が釘付けとなりました。

そして、午後11時、今年の山あげ最後の行事となる「笠拔」の始まり

山あげ祭の主役たち〜鳥山山あげ保存会芸能部会・囃子方・若衆の姿〜



①子どもみこしが元気に繰り出す②「蛇姫様」のクライマックス③日間屋台を引き連れた金棒曳きの5人④4町によるブンヌキ⑤終日にぎわう露店街⑥白蛇を操る若衆⑦西川扇士浪さんによる「老松」⑧祭関係者が全員集合⑨全公演を終え手締めをする若衆⑩千秋楽で披露された「関の扉」⑪来年の当番「仲町」による還御。



です。演目は「関の扉」夜遅くにも関わらず、大勢の観客やカメラマンが訪れました。また、最後に山あげ保存会芸能部会で踊りを指導する西川扇士浪さんによる「老松」も披露され、全公演を無事に終えました。

その後、舞台上に、金井町の世話人や若衆が集まり、あいさつしました。筆頭世話人の菊地義之さんは「少ない人数ながらも若衆同士が団結し、頑張る姿が見えた。これから時代が変わっても仲間としてまた一緒に頑張っていこう」とあいさつ。木頭の関澤智さんは「山あげの準備を始めてから約半年間、絆を一番に大切にしてきた。また、このメンバーで祭ができるように絆を深め輪になってやっていこう。そして、支えてくれた皆さんありがとうございました。」

一方で、夕方から担がれる「還御」のみこしは、午前0時30分頃に八雲神社にお宮入りし、3日間の山あげ祭に幕が下ろされました。

山あげ祭を盛り上げる中心を担うのは、烏山山あげ保存会芸能部会や囃子方、そして、若衆です。ここではその主役たちを紹介します。

○烏山山あげ保存会芸能部会

山あげ祭の舞台に上がる人たちは皆「烏山山あげ保存会芸能部会」に所属しています。その中でも、踊り子の皆さんは、西川流西川扇士浪先生の指導のもと、年間を通して山あげ会館2階の稽古場で練習に励んでいます。

祭期間中は猛暑。板張りの舞台は、火傷を負うほどの熱さですが、それに動じることなく美しく舞い続ける精神力は、まさに日々の練習の賜物です。

また、踊りに欠かせない三味線や唄を太夫座敷で披露するのは常磐津の皆さん。常磐津とは、浄瑠璃から始まった歌舞伎や舞踊の芸能で、京都から江戸へと伝わり流行を期しました。山あげにもその流行を取り入れ、今や常磐津と踊り子は山あげにとって切っても切れないものとなっています。

○囃子方

山あげでのお囃子は、太太鼓1人、小太鼓2人、笛1人、鉦1人、鼓2人が1組となっており、大屋台御拝内側に太鼓3人が並び、その後ろに笛と鉦が座ります。お囃子が始まると、1人で2〜3時間は演奏し続けます。

烏山中学校では、郷土芸能部という部活動があり、若者たちの育成に力を入れています。

○若衆

若衆とは、八雲神社の宮座組織の中の一部のことをいいます。縦割り社会になっており、「若衆は世話人と直接話は出来ない。役付の者を通し許可をもらう」「上からの言葉（命令）に従い、仕事は仲間と協力して一緒に言う」などといった「おきて」が今も忠実に受け継がれています。

昔は若衆に入れるのはその家の長男のみ、家柄や格式、人柄によって役が付いたり付かなかったりと差別が厳しいものでした。今では、間口が広がり、6町以外の人も若衆に入れるようになった町もあります。

山あげ祭では、当番町になった町の若衆たちが、一糸乱れぬ団体行動を見せます。その数約1000人。華やかな舞台の裏では、若衆が木頭の拍子木の合図に合わせ、山をあげたり舞台装置を動かしたりと俊敏な動きで祭を支えています。

また、公演場所への移動には、人力で動かす「地車じんぐるま」を使います。この地車は、公演時には変形して舞台となり、撤収の際は再度変形して台車となり、解体した波や館、ガマなどを載せます。しかしこの地車には方向転換は一切なく、副木頭の指導のもと、操作するのは若衆の力と梶棒のみ。その指揮を執るのは「副木頭」の役目です。移動の様子は迫力満点。多くの観光客の目を釘付けにしました。



①三味線や唄を太夫座敷で披露する常磐津の皆さん
②稽古場で練習を重ねる踊り子たち③屋台御拝内側でお囃子を演奏する囃子方④公演場所に到着すると太鼓以外は屋台から降りて演奏します⑤素早い動きで山の一部を運ぶ若衆⑥プレーキの無い地車で移動⑦舞台裏では舞台装置を人力で動かす若衆。

嵐山睦会で恒例の万灯みこし担がれる 祭をさらに盛り上げる



嵐山睦会の万灯みこし。

山あげ祭で恒例となった嵐山睦会(大金康男会長)の万灯みこしが、22日(金)の夜、八雲通りのある嵐山睦会の会所から繰り出し、まちを練り歩きました。

当日は、県内外から約300人の担ぎ手が集結し、

農コン「浴衣でないと」 カッシーレが出会いの場を提供

7月23日(土)、烏山公民館で市内の若手農業者団体「カッシーレ(大野博康代表)」主催による農コン「浴衣でないと」が、市結婚相談所などと共催で開かれました。

当日は、男女45人が参加し、ハーブを練り込んだ和紙を使ったうちわ作りで交流を深めました。また、浴衣の着付け体験なども行われ、着付け後は、山あげ祭に繰り出し、楽しいひと時を過ごしました。



うちわ作りを体験。

烏山信用金庫13店舗で 山あげ祭の動画を放映しPR



山あげ祭の動画が流れる店内。

烏山信用金庫と締結した包括連携協定の事業の一環として、6月1日(水)から7月22日(金)にかけて、同信用金庫の本支店13店舗内に山あげ祭の特設PRスペースを設置し、祭の動画を放映するなどPR活動を行いました。利用者は、待ち時間などで映像を楽しみました。また、同信用金庫では、本市のPRコーナーも設置し魅力発信も行っています。

営業戦略推進部隊 JR大宮・宇都宮駅で祭をPR

山あげ祭開催に向け、市の若手職員で実践活動を行う営業戦略推進部隊が、7月12日(火)にJR大宮駅で、15日(金)にJR宇都宮駅で今年も祭のPR活動を行いました。

PR活動には、浴衣や法被を着用した部隊員が、駅を利用する通勤・通学客に山あげ祭のパンフレットなど約2000部を配布しました。



パンフレットを配布する部隊員。

新宿⇄烏山 臨時列車「烏山山あげ祭号」が運行！ 車内・烏山駅では地域住民によるおもてなしも。

7月23日(土)、24日(日)に、臨時列車「烏山山あげ祭号」が新宿駅から2便運行され、268の指定席が早々に売り切れるほどの人気ぶりでした。

車両は、「リゾートやまどり485系」6両編成。新宿駅から乗車した乗客は、宝積寺駅で快速の「キハ40」3両編成に乗り換え、烏山駅へと向かいました。

烏山山あげ祭号の車内では、烏山語りの会による昔懐かしい民話が語られ、乗客はゆったりとした時間を過ごしました。烏山駅では、地域住民や市議会議員など約200人が烏山和紙の原料「楮」の枝を使った手旗で到着した観光客を歓迎。また、駅前を発着点としてJR東日本が主催する駅からハイキング「日本最大級の野外劇『山あげ祭』をとことん味わうハイキング」が行われたほか、「駅前おもてなし広場」として、本市の土産品や中山かぼちゃアイスクリームなどが販売されました。

臨時列車に乗車してきた観光客は、山あげの公演場所に向かい、絢爛豪華な舞台を楽しみました。



【写真】右上から左下へ：新宿駅から宝積寺駅まで運行した「リゾートやまどり485系」／車内で烏山語りの会による民話語り／乗客を歓迎する市議会議員の皆さん／地域住民が烏山駅前で観光客を手旗で歓迎／にぎわう駅前おもてなし広場／珍しい色違いの3両編成の「キハ40」。

山あげ祭 とびっくす



山あげ祭期間中、そして、祭開催に向け、清掃活動や関連イベントなど様々な催しが行われました。その中から、いくつかの様子を紹介します。

市街地の美化を！ 様々な団体が清掃活動を決行

7月24日(日)、FCバジェルボ那須烏山(三森文徳会長)では、祭会場の清掃活動を行いました。

当日は、チームに所属する選手約40人とその保護者などが集い午前6時から清掃を開始。およそ1時間かけて美化に努めました。

また、祭を前に20日(水)には、県烏山土木事務所と市、県建設業協会烏山支部が共催で、今年で4回目となる「山あげ祭応援クリーン作戦」が行われ、120人が参加しました。

山あげ会館前で出発式を行った後、祭で屋台が練り歩く道路のゴミ拾いや歩道の除草などを約2時間かけて行いました。



清掃活動をするFCバジェルボの選手。



屋台が練り歩く道路を清掃。

烏山燦陶会が作品展 烏山高校生によるお茶席も大好評



陶芸家8人の作品が並ぶ会場。



烏山高校茶華道部がお手前を披露。

烏山燦陶会(瀧田項一代表)では、7月22日(金)から24日(日)にかけて、那須烏山商工会を会場に、「烏山燦陶会展」を開き、多くの観光客が訪れました。

展示作品は、市内の陶芸家8人が制作したもの。色や形、風合いなど一つひとつ異なる作品に、訪れた人の目を楽しませました。また、白和会と烏山高校茶華道部によるお茶席を設け、大勢の来客者にお点前を披露しました。

山あげ会館前広場でイベント ふるさと物産店やステージにぎわう

祭期間中、山あげ会館前では様々なイベントを催し、観光客をもてなしました。

22日(金)から24日(日)にかけては、ふるさと物産店として、山あげ祭応援せんべいや山あげTシャツのほか、ご当地グルメなどの販売が行われ、大勢の人が足を運びました。

また、23日(土)と24日(日)は、特設ステージで、歌謡ショーやダンス、ジャズの演奏などが行われ、会場を盛り上げました。



ご当地グルメの販売。



会場を盛り上げたよさこい。

外国人観光客を歓迎！ なすから英語塾で祭を案内



外国人観光客を案内。



英訳したポスターに興味津々の観光客。

昨年から市民向けに始まった「なすから英語塾」では、外国人観光客を歓迎しようと、祭期間中に山あげ会館前観光案内所で、英語塾の受講生たちが英語による観光案内を行いました。

これは、英語塾の実践研修として実施したもので、ユネスコ無形文化遺産への登録も間近ということもあり、多くの外国人観光客が訪れ、祭の歴史や開催場所の確認などに利用しました。

また、英語塾の受講生が市民の目線から制作した「那須烏山市のおすすめの場所や自然・食べ物」を英訳したポスターを山あげ会館前案内所、中央交差点案内所、山あげ会館内に展示しました。どのポスターも分かりやすく好評を博しました。